



中野区

HPアドレス

<http://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/>

面積15.59km²
 世帯数185,914世帯
 人口300,298人
 (うち外国人).....10,598人
 予算1,165億円
 職員数2,167人

※平成24年8月1日現在

※平成24年度一般会計当初予算



中野駅北口にある区役所本庁舎(写真中央)とランドマークである「中野サンプラザ」(写真右)。



哲学館(現東洋大学)の設立者井上円了が私財を投じて建設した「哲学堂」。平成21年に東京都指定名勝に選ばれた。



中野の魅力や未来の姿を表すコンセプトワード。区のイメージアップをねらう。

歴史・見所・名所

江戸幕府が開かれると、村々が整備され中野郷は12の村に分けられ、幕府の直轄領と旗本・御家人領となりました。また、青梅街道に中野宿が開かれ、多摩地域からの物資の集積地として栄えました。元禄年間に5代将軍綱吉は「生類憐みの令」を出し、江戸の野犬を收容するための「お囲い」を今の区役所辺りに作りました。綱吉の死後廃止された「お囲い」の跡地の一部には、8代将軍吉宗が桃を植え「桃園」が作られました。

明治に入り旧村が合併して中野村と野方村が誕生するとともに、甲武鉄道(現在のJR中央線)が開通して、中野駅ができると青梅街道沿いから駅周辺に市街地の中心が移っていきます。さらに関東大震災後に急激な宅地化が始まり、昭和に入り西武新宿線が開通して区北部も発展を始め、昭和7(1932)年には東京市の市域拡張に伴い、中野町と野方町が合併して中野区が誕生しました。その後も郊外の住宅地として発展してきました。

現在の中野は、大都市東京の中の住宅街であるとともに、お笑い・音楽などのエンターテインメントにあふれる街となり、「中野サンプラザ」を始めとした大・小とりまぜたホール・劇場があり、数々の劇団も活動しています。また、中野駅北西の「中野四季の都市」地区に「四季の森公園」や業務・商業ビル、大学のキャンパスなどが新たに整備される一方、中野通りや哲学堂公園は桜の名所として親しまれています。

概要

中野区は23区の西部、武蔵野台地の東端にあり、神田川、妙正寺川などが東西方向に流れています。

人口は、現在、30万人前後で推移しています。人口密度は23区中で2番目に高く、世帯の半数以上は単身世帯で、20代・30代の人口比率が高くなっています。住環境は、幅員4m未満の道路が6割を占めるなど、過密な一方で都心に近く交通の便が良く、アパート・マンションなどの賃貸住宅が多い、生活利便性の高い、生活都市としての性格を色濃く持っています。

戦前から住宅地として発展してきたため、企業数は少なく、商業・サービス業などの第3次産業が全体の8割以上を占めています。区の中央に位置する中野駅周辺や東部の東中野駅周辺、南部の中野坂上駅周辺などが、企業の集積やたくさんの飲食店でにぎわっている一方、道を1本外れると閑静な住宅地が広がっており、北西部では生産緑地を見ることができます。

中野区は中野区自治基本条例や区民公益活動の推進に関する条例、地域支えあい活動の推進に関する条例の制定など、現在に至るまでに培ってきた区民自治の歴史を尊重しつつ、高齢化や環境の問題、まちづくり、区のイメージアップ戦略への積極的な取組みなど、持続可能な地域社会の実現のために区民とともに着実な歩みを続けています。

主要課題

「新しい中野をつくる10か年計画(第2次)」では、基本構想で描く「多彩なまちの魅力と支えあう区民の力」であふれる中野を実現するための方策とともに、区民生活に影響を与える大きな課題の解決のため、以下4つの戦略を定め優先的に取り組んでいます。

(1) まち活性化戦略

産業を活性化し、人々の活動と文化を生み出すとともに、そのための基盤整備を中心とするまちづくりを進めることにより、10年後の中野を元気でいきいきとしたまちへ変えていきます。

(2) 地球温暖化防止戦略

省エネルギーの推進と自然エネルギーの活用、ごみの発生抑制と資源化の推進を図り、事業者と家庭における二酸化炭素の排出量を削減するとともに、みどりのネットワークづくりに取り組みます。

(3) 元氣いっぱい子育て戦略

あすの中野を託す子どもたち一人ひとりを、家庭、地域、学校のそれぞれが連携・協力しながら、社会全体で育てていきます。

(4) 健康・生きがい戦略

気軽に取り組める健康づくりメニューを充実し、健康的な生活習慣を確立するとともに、生活機能の維持向上に対する取組みを推進し、生涯現役を続けられるまちを目指します。

将来展望

中野駅北西側(中野四丁目地区)には、かつて警察大学校等跡地と呼ばれていた約14haもの広大な空間がありました。平成24(2012)年春に、このスペースはオフィスビルや大学などの先進的な都市機能と、防災性を兼ね備えた豊かな緑・オープンスペースのある「中野四季の都市」として生まれ変わりました。今後は、ハード・ソフト両面での中野駅周辺のまちの将来像の他、整備についての基本的な考え方や実現に向けた取組みの指針となる「中野駅周辺まちづくりランドデザインver. 3」を基に、区民、民間事業者、行政が協働でまちづくりを推進し、より良いまちづくりの循環を生み出していきます。

この中野駅周辺地区の整備をはじめ、10か年計画(第2次)で示した戦略・施策を着実に推進し、基本構想が描く中野のまちの将来像を実現するため、柔軟で強い経営体質づくりを進めていくことが必要です。

「目標と成果による区政運営」(右上図『P D C A サイクル』参照)を徹底し、発生主義会計の導入によるコスト管理や資産のマネジメントの強化など、価値の高いサービスを提供していくための改革を進めています。

また、職員2,000人体制による「小さな区役所」を目指すため、人材マネジメントにも注力しており、職員が成果を上げるための行動基準(中野区版コンピテンシーモデル)を活用し、職員の自律的な能力開発や適材配置に活用し、区政の成果向上を図っています。



中野駅の北西に整備された「中野四季の森公園」。

